



MILF武器引き渡し・退役式典の会場に運び込まれた銃火器＝マギンダナオ州スルタン・クダラット町で2015年6月16日撮影

Bangsamoro 報告

<第7話>

武装解除

ミンダナオ平和構築支援の現場から

中坪 央暁

(国際開発ジャーナル社編集委員)

ずらりと並んだ銃火器が黒く鈍く光っている。台の上には対戦車兵器PRG、M16自動小銃などに交じって、かなり古びた小銃も混じる。床に置かれたのは迫撃砲3門と重機関銃1丁など。ミンダナオ包括和平合意に基づき、フィリピン政府とモロ・イスラム解放戦線(MILF)で構成する和平交渉団の下に置かれた「独立退役機関」(IDB)のスタッフが、全部で75の銃火器を1丁ずつ確認しながらタグを付けていく。

バンサモロ地域の中心都市コタバトの北郊、MILFの軍事拠点ガラパン・キャンプに程近いマギンダナオ州スルタン・クダラット町。今は使われていない旧州庁舎の敷地に建つ巨大な屋根付き

の集会施設で2015年6月16日午前、和平プロセスの焦点であるMILF武装解除に向けた初めての武器引き渡しおよび兵士退役式典が開催された。ヘリコプターで到着したアキノ大統領、デレス大統領府長官(和平担当)、MILFのムラド議長、イクバル交渉団長らが壇上に上がり、MILFメンバーとその家族、政府軍・警察、外交団、国際機関の関係者など約1,500人が会場を埋めた。

国歌斉唱とイスラム教・キリスト教それぞれのお祈りで始まった式典で、ムラド議長は「武器引き渡しと兵士の退役は、MILFが政府との約束を必ず守ることを示している。われわれは武装組織ではなく、政治組織としてバンサモロの人々に貢献

していく」と述べ、難航しているフィリピン議会のバンサモロ基本法案（BBL）審議をはじめ、合意事項の速やかな履行を政府側に迫った。黄色いポロシャツ姿のアキノ大統領は「バンサモロの皆さんの誠実な対応に敬意を表する。これは政府とMILFの信頼の証である。BBL審議を妨げようとする者もいるが、私は成立に向けて全力で取り組む」と英語ではなくタガログ語で演説した。

会場の一角では、政府職員が緑色の揃いのポロシャツを着た退役兵士145人に一人一人面談し、退役と引き換えに健康保険の加入登録、生活支援金2万5,000ペソ（約6万8,000円）の支給手続きを進めた。深いしわを刻んだ歴戦の“老兵”を含む40～60代の中老年層ばかりで、政府による今回の措置は、福利厚生面をサポートして彼らの社会復帰を促すのが目的である。退役兵士の一人、MILF参謀本部所属のジェイコブ・パラオ（56歳）は「1970年代から戦ってきましたが、和平合意によって状況は変わりました。この日を迎えたことを誇らしく嬉しく思います。2ヘクタールほどの土地があるので、今後は普通の農民として生活していくつもりです」と話すとともに、「政府が和平合意を誠実に実行すれば、誰にとっても良い未来が開けるでしょう」と期待を示した。

145人という人数は、推計1万1,000人のMILF兵士の1%余りに過ぎず、引き渡された武器もごく一部である。とはいえ、今回の儀礼的な式典は、包括和平合意の付帯文書「正常化」に明記された通り、武装解除・退役の第1段階として実施されたものであり、第2段階を経て最終段階の全面武装解除に至る重要な第一歩になる。和平プロセスの最初の関門であるBBL審議は、反対勢力の妨害工作や1月のママサパノ事件の影響で進展せず、フィリピン独立記念日前日の6月11日までの会期中にも成立しなかった。MILF側はいら立ちを募らせており、こうした状況下での片務的な武装解除は苦渋の決断と言えるが、「（審議を促す）議会への前向きなメッセージになる」（イクバル交渉団長）ことに期待をつなぐ。



式典を終えて笑顔を見せるアキノ大統領（前列右）とムラド議長（同左）



コタバトにはミンダナオ平和構築支援全体を管理・運営する目的で、JICAプロジェクト事務所（CPO）が2013年4月に開設され、中長期のバンサモロ開発計画策定などのコンサルタントチームもすぐ近くにオフィスを構えている。

この7月にCPOのプロジェクト総括に就いたのが、JICA平和構築・復興支援室の落合直之。国際監視団（IMT）団員として2010～12年コタバトに駐在した落合は、フィリピン事務所勤務の経験もあり、MILF幹部をはじめ当地の関係者に身内のように親しまれている。和平プロセスがヤマ場を迎えた今、「アキノ大統領とムラド議長の信頼関係に基づいて成就した和平合意です。BBLの成立が危ぶまれているからこそ、政府とMILFは互いを尊重しつつ、誠実に対応することが求められており、JICAは開発を通じて和平プロセスの進展を支援していきたいと考えます」と語る。

ミンダナオ案件では、長期専門家の西丸崇、安永知子の2人が繁雑な業務を担っている。西丸は英国留学後、NGO駐在員やJICA企画調査員として旧ユーゴスラビア、スリランカ、南スーダンで



1970年代から戦ってきたMILFの退役兵士たち

平和構築に携ってきた。主にクイック・インパクト事業を担当し、「現場では常に住民一人一人の幸せな生活を実現することを念頭に置き、平和を求める人々の期待に応えて、目に見える成果を着実に築き上げていきたいと考えます」。安永は音楽の世界を目指していたが、思うところあって英国の大学院で学び、NGOでパレスチナ、ケニア、日本国内の難民支援を経験した後、JICAの仕事に就いた。人材育成などの担当として「紛争を乗り越えて平和な社会を築くために、バンサモロの多くの人々が忍耐と情熱を持って努力しています。当事者である彼らの力になれるよう、謙虚な気持ちで業務に取り組みたいと思います」と話す。

日本の対フィリピン国別援助方針は、重点3分野のひとつに「ミンダナオにおける平和の定着への支援」を明記しており、首都マニラのJICAフィリピン事務所（丹羽憲昭事務局長）は、本部と調整しながらCPOをサポートしている。上級アドバイザーとして、毎週のようにマニラ～コタバトを往復している力石寿郎は、JICAカンボジア事務局長、中東欧州部長、広報室長を歴任した後、2012年に現職に就いた。フィリピン事務所次長として

1995～97年、ムスリム・ミンダナオ自治区（ARMM）政府の支援に関わった経験があり、「MILFのバンサモロ政府は、ARMM政府を超えるものでなければ意味がありません。スケジュールが遅れていますが、現実的な方策を探りながら、多少時間をかけて最終和平を実現すれば良いのではないのでしょうか」と楽観的に考えている。



戦後70年の夏である。本題の和平プロセスから話がそれるが、ミンダナオと日本の関係を知る意味で、一人の女性について書いておきたい。

コタバト市街から南西に車で約30分、青い海に面したマギンダナオ州クシオン町に、ミンダナオ生まれの日系2世・酒井ミチコ（78歳）は暮らしている。コタバト日系人会代表を務める長女メリッサに案内してもらって、ヤシ農園に建つ竹材づくりの小さな家を訪ねると、酒井は「まあ！まあ！オハヨゴザイマス！」と少し興奮した様子で迎えてくれた。飾り気がなく、はつらつとした印象で、当然ながら日本人にもフィリピン人にも見える。

日本語は片言だけのミチコが英語で語ったところでは、ミンダナオ島南ラナオ州に広がるラナオ

湖畔の町マラウィで1936年11月、東京出身の酒井ヒロオ、地元の女性プリミティブの長女として生まれた。二・二六事件が起きて、日本が破滅的な戦争に突き進んでいく時期である。「南洋で一旗揚げたい」と当地に渡ったヒロオは、調理具や食器を商う店を営み、当時では珍しく車も持っていたというから、一家は裕福だったようだ。ミチコを筆頭に2男4女にも恵まれ、平穏な生活が続いたが、日米開戦が迫ると日本人は收容所に集められて状況は一変する。



ミンダナオ生まれの日系2世・酒井ミチコ(左)と娘のメリッサ

1941年12月に太平洋戦争が始まって間もなく、ミンダナオ島に日本軍が上陸し、酒井一家は收容所から解放されて一時マラウィに戻る。この頃に臨時開校された日本人学校で習った唱歌『兵隊さんよありがとう』をミチコは筆者に歌ってみせた。44~45年になると、敗走する日本軍とともに各地を転々とする。タガログ語が堪能な父ヒロオは通訳として徴用され、母子は山中に隠れて終戦を迎えた。避難の最中、幼い弟が病死し、戦後かなり経ってから、父親も亡くなっていたことを人伝に知らされた。

戦後は日系人にとって過酷な時代だった。「父の店は略奪され、学校でも『ハポン（日本人）は来るな!』といじめられました」。コタバトに移って、母親は野菜の酢漬けを作って売り歩き、子どもたちを食べさせた。ミチコもフィリピン人宅で家事手伝いをしながら高校を卒業し、商店で働いていた時に、買い物に来たスペイン系フィリピン人男性に見初められ、1957年に結婚する。夫は大地主ロアレス家の出身で、夫婦は2男5女に恵まれ、クシヨンの広大な地所で農園を営む一方、コタバトにも家を持って子どもたちを学校に通わせた。苦労を重ねたミチコの母親は67年、夫

は8年前に亡くなり、現在は息子2人とヤシ農園を切り盛りしている。

日本人の血を引くために、戦後は塗炭の苦しみを味わいながら、ミチコが日系人と認められたのは、実に98年のことである。戦前のミンダナオ島はダバオに2万人規模の日本人社会があったほどで、日系人は少なくない。しかし、ミチコが「迫害を恐れて日本名を捨て、隠れるように暮らす日系人もいた」と話すように、フィリピン残留2世は長

く“忘れられた存在”として放置され、日本政府が調査に乗り出したのは、半世紀を経た95年だった。日本の弁護士や支援団体のサポートを受けて、ミチコは日系人会を立ち上げるとともに、仲間と2度来日し、日本国籍取得の申し立てを裁判所に起こす。幸い弁護士の調査で父ヒロオの戸籍が確認され、ミチコの日本人としての地位が法的に認定された。その一方で、残留日系人が晴れて日本国籍を取得したところ、フィリピン側から長期の不法滞在とみなされて高額な罰金を科せられる問題も起きており、日比政府レベルの人的対応が求められる。

ミチコは今、7人の子どもに加え、孫30人、ひ孫15人の大家族のおばあちゃんとして、何かと忙しく暮らしている。娘5人のうち、ドイツ人の夫を持つメリッサを除く3人は日本、1人はペルーに嫁いでいて、フィリピン・日本・スペイン混血の一族は、その血筋も行動様式も国際的である。「離れて暮らす子たちを含めて、私には家族が何よりの宝物です。いろいろ経験したけれど、こうして元気に暮らしているのが嬉しい。そうそう、メリッサが日本に近々連れて行ってくれるの。向こうで娘や孫たちにも会えるわね、楽しみね」。

*文中敬称略(つづく)